

失ひし時を求めて

堀辰雄と九鬼周造をおもう

同志社大学名誉教授 藤馬 龍太郎

哲学者西田幾多郎が思索に耽って散策したという銀閣寺から若王子まで、疏水ぞいの「哲学の道」は、私も学生の頃好んで歩いた小径だった。気の合ったいまは亡きT君とよく追憶、徘徊したものである。何十年ぶりにこの小径を歩いてみた。心友安枝英神君が眠る真如堂への毎年欠かしなことがない命日の墓参からの帰途、ふと思いたってのことである。桜の蕾は大きく膨んではいるが、まだ開花には少し間がありそうなの三月二十日のことである。境内の随所に「マムシに注

意」と物騒な立て札がある。真如堂の山内から一気に急坂を駆け降り、白川通を横切り疏水分流の小径「哲学の道」を少しばかり銀閣寺方面に寄ったところにある鹿ヶ谷の閑寂で美しい法然院にいたる。丁度大文字の山麓にあたるここには、私が学生時代から敬慕してやまない哲学者九鬼周造の墓がある。かつて幾度となく歩いたこの辺りには数十年前すっかり遠ざかってしまっていた。歩きながら私は次第に静かな心境をとり戻しはじめていた。失ひし時を求めて。その頃最も愛

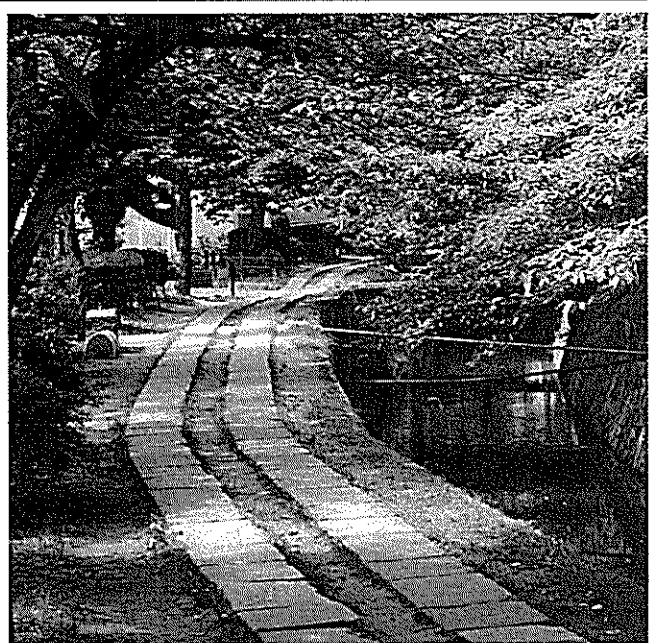
読した二人の、作家と哲学者―堀辰雄と九鬼周造―のこと、そこはかとなく脳裡を去来しはじめていた。いまにして思えば、私の二十代半ばは、青々しい生意気盛りで鼻もちならない天邪鬼(あまのじゃく)であつたように思われる。哲学に憧れ、文学に心酔して法学部に在籍しながら六法全書などには目もくれず、やたらと哲学書を読み漁り、また芥川龍之介、堀辰雄、太宰治、織田作之助、坂口安吾やA・ランボー『酔いどれ船』J・P・サルトル『嘔吐』R・M・リルケ

『マルテの手記』などの文学書を耽読した。とりわけ、堀辰雄の『美しい村』『菜穂子』『風立ちぬ』には感動のあまり、それらをリュックに詰め込んで矢もたても堪らず夜行列車にひき乗って旧軽井沢や浅間山麓信濃追分にある堀辰雄の山荘の辺りを、小説のシーンとてらし合わせながら彷徨い歩いたことが懐かしく思い出される。『風立ちぬ』は、医師から安眠をきびしいい渡されていく婚約者節子と「私」とのAが岳山麓富士見高原結核療養所(サナトリウム)での『風変な愛の

生活』が綴られた慟哭の作家の体験を素材に書かれたものである。詩人ポール・ヴァレリーが故郷の美しい地中海沿岸の港町セート(Seète)を詠んだ詩『海辺の墓地』いまはその彼もそこに眠っている。の最終節「風が立つ／生きることを試みなければならぬ。広大な大気がわたしの本を開き、また閉じる。波は粉々に砕けて岩からほとばしる！飛び去れ、めくるめく本のページよ、砕け波よ！飲ぶの水で砕け、白い帆船が餌をついばむこの静かな屋根を…」この冒頭の一句「Je vent se lève, il faut tenter de vivre」を堀辰雄は「風立ちぬ、いざ生きめやも」と訳して、美しくも悲しい、しかし強い生命の躍動の意思をもこめたこの作品の題名としたのであつた。

私の貧しい青春の心の糧として忘れることのできないもう一人の思想家、それは九鬼周造である。私の学生時代は敗戦直後で世情は騒然、惨々たるものがあつた。一日の食糧は配給米二合三勺(約二九七g)、それも二十日以上遅配の連続である。そのため、市民はヤミ米を苦労して手に入れてやと飢えをしのいだ。そんな時、配給生活をかたくなに守り、栄養失調で死んだ裁判官がいた。東京地裁の山口忠良判事は「裁く立場のものがヤミで手に入れた食糧を食べていては、正しい判決が出来ない。食料管理法は悪法である。しかし法律は守らなければならぬ」といって、自らは決してヤミ米を口にしなかつたという。そのため体力の衰えは激しく、遂に昭和二年一〇月に死亡したこと、当時の新聞に美談として大きく報道されていた。私達若者は、思想的にも飢えていた。西田幾多郎全集第一巻(昭和二年)が刊行発売される朝、空腹を抱えながら三晩も徹夜した若者達が神田神保町の岩波書店の前に長蛇の列をなし

た、新聞が写真入りで報じていたのを、私はいまもはっきり記憶している。このように、食にも本にも飢え、枯渇していたある日、ふと古本屋で偶然手にしたのが、九鬼周造の『いきの構造』と偶然性の問題』であつた。当時すでに三木清(『龍のおとし子』8、9号で少し触れた)も九鬼周造も世を去っていたが、この二人との出会いに私はぞっこん傾倒した。九鬼の没後二年、九鬼がパリ滞在中の生活を妖しくも美しくうたった詩歌集『田里心景』が、旧制一高以来の親友で、京大哲学科の同僚でもあった哲学者大野貞祐(のちに文相)によって編まれ、出版されたが、その『後記』の中で大野は次のように書いていた。「九鬼君より



哲学の道

同窓会は どうあるべきなのでしょう？

藤馬会会長 福塚 秀彰 (70年度生)

今年も、藤馬会の日がやってきました。秋の京都で過ごす一日は、たぶん藤馬会の皆さんには、その年その年の楽しみの一つになっているのではないのでしょうか？それであればあるほど、役員さんの任務は大きいものと思えます。たまたま、立命館の法学部3回生の学生と話す機会があり、彼女が、所属するゼミの同窓会づくりの仕事をしているというお話を聞きました。

ゼミの先生が、過去に在籍していた大学の学生も含めて、同窓会づくりに頑張っているとのこと。まずは、名簿作りから。これが、大変なことです。(藤馬会は、かなり早い時期に出版したので比較的苦労は少なかったのではないかと記憶します) 発足式の会場、これまた大変。いろいろな意見が出て、最終決定に至るまであやこやうな、なかなか、懐かしいお話しだと思つて聞いています。

最近、同窓会の仕事引き受けます(名簿作成から、会場探しまで)という仕事をする会社が現れる時代です。同窓会はどうあるべきなのでしょう？一つ、この原点に立ち返って、私どもの藤馬会の運営にも創意と工夫が必要な時期に来ているように、今年度の藤馬会を迎えるについて考えることしきりです。

今年、先生の講演をお願いしました。卒業するとなかなか、お聞きする機会のない「授業」です、楽しみにしています。九鬼君より

が哲学界における真に独自な存在であつた。学は古今を兼ね東西に渉りて博覧精通し、まことに驚くべく豊富な学殖を有し、しかもその学問的分析は周匝(しうさ)綿密を極めた。この鋭利厳密な分析家は不思議にも同時に勝れた芸術的魂であつた。真理への徹底的追求は美への限りなき憧憬を伴っていた」と。九鬼自身もみずからの学問的態度について『文芸論』の中で「少数の読者と共に、哲学と文学との間の小道をさまよいながら、思索し、感覚し、憧憬することゝ願つてゐる」と、死の四ヵ月前にその『序文』で述べている。九鬼は、一九二二年(大正一〇年)秋、約一〇年在籍した東京帝大大学院を退学して渡仏。二二年一〇月からハイデルベルグ、二四年秋にパリに戻り、二七年四月から再びドイツに渡り、フライブルグ、そして一月にはマルブルグに移ってハイデッガー教授に師事、翌二八年(昭和三年)五月末にパリに戻り、一二月に帰国(金をついてゐる。こ

の頃九鬼は、パリでサルトルと交流をもっていたことが知られている。フランス哲学とフランス語を教えるはしいと新聞広告を出し、家庭教師として応募してきただがサルトルであったという。週に一度、おそろく二ヶ月半ほどの間であったらしい(岩田文昭『九鬼とフランス哲学』坂部恵他編著「九鬼周造の世界」ミネルヴァ書房(二〇〇二)所収一七六頁) 甲南大学にある九鬼周造文庫には「サルトル氏」と題した九鬼のノートとサルトル自筆の数枚のメモが遺されている。たしかにサルトルは当時、日々に強い関心をもち、一九一九年二四歳のとき、京都のフランス語教師の職(関西日佛学館か?)に応募するが採用されなかった(「サルトル」別冊「環」二一五(二〇〇五)三〇二頁)。九鬼はまた足かけ五つのパリ滞在中、パリから署名(S.K.)で與謝野鉄幹・明子夫妻が主宰する雑誌「第二明星」に何度か詩歌を投稿している。大正一四四月号の巻頭を飾った短歌は、次の三首であった(のちに『巴里心景』に収録)「酔ひ痴れて更けし酒場 眠れるも 青き瞳の君ゆゑとせん」「ひと夜寝て女役の肌ふれ 巴里の秋の 香の香もく」「さくら咲き心に人死ぬ国なりと ふる」とをしも語りつるかな」(小山俊輔「九鬼周造の押論とフランス文学」宇佐編「日仏交感の近代」京学術出版会(二〇〇六)三九頁)。なんという妖へ官能の解放、みずみず

集に「偶然性」ベルグソン哲学をうたった「純粹持続」や「弁証法」といった堅くらしい題で哲学的な詩(?)も収めている。例えば、ボードレールの官能の世界とカントの厳格な道徳律の世界を自己の生に投影させた「『悪の華』と『実践理性批判』とがせせう笑へり肩をならべて」「心云ふ『この煩悩』ややありてたましひの云ふ『カントに還れ』また『灰いろの抽象の世に住まんに濃きに過ぎたる煩悩の色』とも詠んでいる。『粹人』としても有名で、祇園でもいろいろ遊んだという噂もしばしば。京大に祇園のお茶屋から講義に通ったという有名なエピソードもある。(「復活した『幻の文庫』九鬼博士蔵書」昭五一・六・一八朝日紙)。このように九鬼の思考と生活は、まことにユニークであり、尽きない魅力にみちていた。それにしても不思議なことは、哲学思想も生活態度も、そして性格も全く相反する九鬼と天野との終生の心の交わりである。九鬼もそのことについて随想記「をりにふれて」のなかで感謝の念をこめて綴々と述べている(一五八頁以下)が、足かけ八年に及ぶ仏仏の留学(遊学?)からの帰国を促がし、九鬼にとってなんの縁故もなかった京大哲学科に講師として推薦したのは、当時助教だった天野貞祐その人であった。羨ましい、美しい友情である。

九鬼周造は昭和一〇年、ライフ・ワークともいうべき『偶然性の問題』を出版して、直に直面して、大きく驚くのである(一頁)で始まる。このテーマは、彼にとって最も重要な哲学的課題であった。この書を完成した時、それに寄せる思いと、その性格について次のように語っている。「たまきはるのいのちのはすみ灰色の言葉に盛りて書は成りにけり」「わくら葉のものの『はすみ』をかくたくなの論理に問ひて一巻をなす偶然論ものしおはりて妻にいふいのち死ぬとも悔ひ心なし」さらに「一巻にわが半生はこれども繙く人の幾たりあらむ」九鬼をして「いのち死ぬとも悔ひ心なし」とまで詠ましめたこのテーマは、マルブルグでハイデッガー教授の現象学的存在論、実存主義の教示を受けた時、明確に彼の思考の中にフォルムを与えたことになった。とくに九鬼が深い関心をもち、たのび、人間は意味なく、自ら選んだものでないさまざまな条件を背負わされてこの世界に投げ込まれた世界内存在(Under-Welt-Sein)であるというハイデッガーの「被投性」(Geworfenheit)という思想であった。この考え方がやがて九鬼の中で「偶然性」の問題として大きく展開されていくことになる。九鬼は「どうして虫でなく、鳥でもなく、獣でもなく、人間であるという偶然」(「をりにふれて」一八七頁)を問題にする。なぜ自分は日本人として生れてきたのか。フランス人でも中国人でもなく、そして一七世紀にでもなく、一八世紀にも生れる可能性もあったら……というわけであ

在に直面して、大きく驚くのである。「偶然性の核心的意味は『甲は甲である』といふ同一律の必然性を否定する甲とこの邂逅である。『偶然性の問題』一四八頁)という。つまり、偶然な邂逅または邂逅として定義される。偶然性は「我」と「汝」との出会いであり、邂逅であるというわけである。九鬼の詩に『偶然性』と題する次のような一節がある「お前と俺、俺とお前めくり逢ひの秘密、恋の反律。これは人生の幾何学、なんとかが解いてはくれまいか」と、偶然性の核心にある「我」と「汝」との出会いをうたっている。九鬼はこの本の結論として最終頁で「観・佛・本・願・力。遇・無・空・遇者」という「浄土論」の一文を引用して、そこから

「遇う」のは現在において我に邂逅する汝の偶然であり、「遇うて空しく過ぐる勿れ」という命題を提示して、この書を閉じる。そこには、一木一草、出会うものすべて「一期一会」であり、この人間の現実的存在(九鬼はこれを「実存」と名づけた)の中で、この偶然、出会いこそ大切にすべきであるという九鬼の哲学思想が貫流しているといえよう。

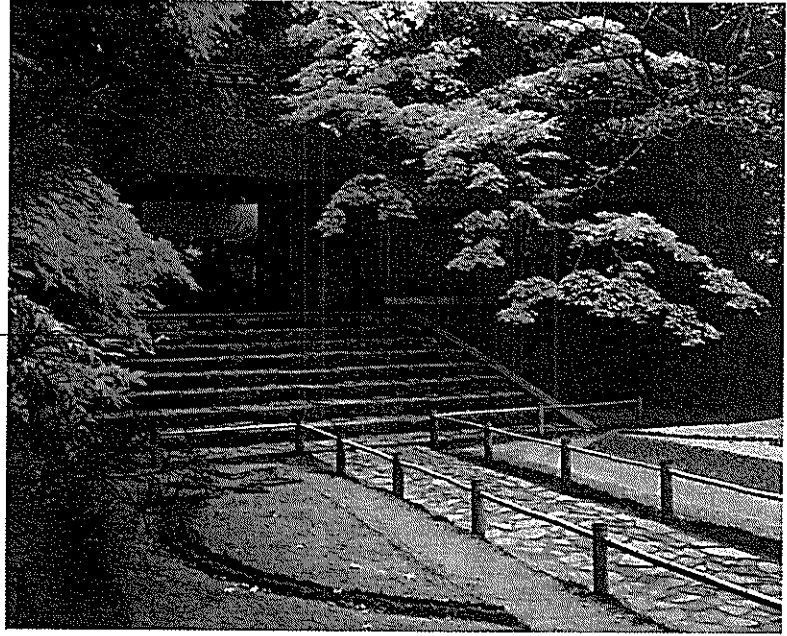
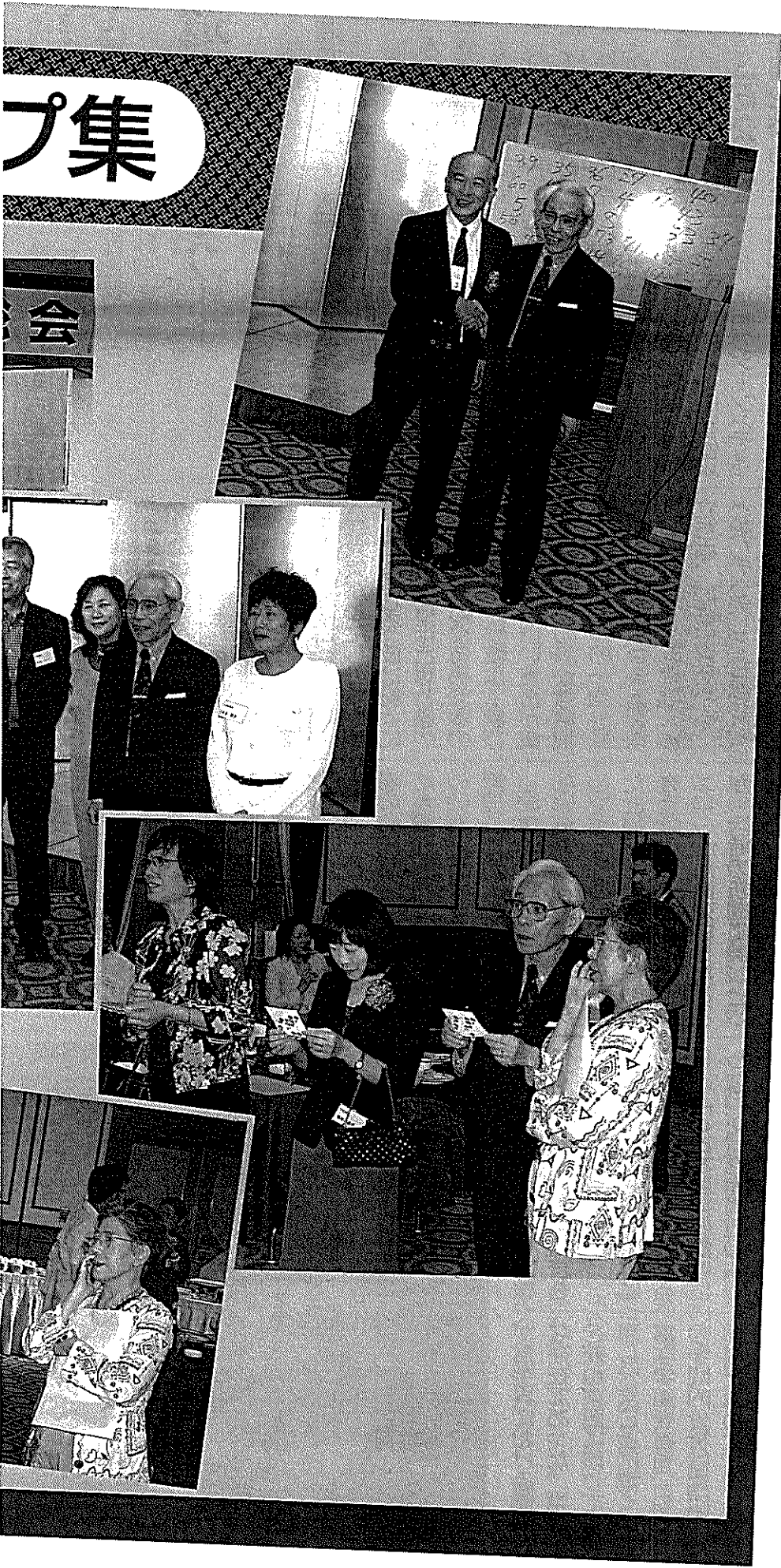
静寂な法然院に入るとすぐ、私は九鬼周造の墓前に付んだ。僧法然によって思索と瞑想の場として造営されたこの法然院は、最晩年に、九鬼自ら設計した数寄家造りの山科の新居に移る迄、九鬼が長年住み慣れた南禅寺草川町からほど近い場所にある。九鬼は好んで

思索と散策の途すがら法然院に足を運んだという。「訪ひ来れば法然院は冬さびて 僧のつくなり入相の鐘」の一句を詠んでいる。九鬼周造は、昭和一六年(一九四二)五月六日、五三歳の若さで世を去る。遺言によりこの法然院に葬られた。ここには有名な人の墓も多い。九鬼の墓石のすぐ後に桜の老木が一本、その

下に谷崎潤一郎の墓がある。一對の丸い墓石に「空寂」とある。少し離れて河上肇夫妻の小さい丸い墓石が二つ仲睦いかならんんでいる。九鬼の墓石は、どこにでもあるような極めて簡素なものであるが、しかしすっきりとした、どこか気品にみちており、「いき(粹)」に生き抜いた人ふさわしい。墓石にはただ「九鬼周造之墓」とだけあり、側面に「見はるかす山の頂 梢には風も動かす 鳥も鳴かず まてしはしやかに汝も休はん」とゲーテの「さすらい人の夜のうた」の一節が刻まれている。この筆蹟は、かねて天野の依頼を受けていた西田幾多郎が、その死の直前に約束果たした絶筆であるという(高坂正顕『西田幾多郎先生の生涯と

思想』弘文堂昭三三、三三四頁)。まことに短かくはあったが、豊かで美しい九鬼周造の人生であった。私達は、藤馬ゼミでの「偶然」の「わくらば」邂逅、出会いに、一期一会を心から大切に「たまきはるのいのちのはすみ」に「遇うて空しく過ぐる」ことのないよう「悔い心」なく交わりつづけていきたいものである。

藤馬会も第二〇回総会を迎えさせて頂きました。これも歴代会長はじめ役員の方々、そして会員の皆様のおかげにかなわない暖かいお心遣いとご支援の賜物と深く感謝いたしております。皆様の一層のご健勝を心から祈念いたしております。



法然院

置を斥念相ノ上デます。

小川裕司 (79年度生)

「租税教育の推進」がある。その内容は、主に、次代を担う児童・生徒に租税の意義や役割を正しく認識してもらう、というものである。

「校長先生にお会いして作文応募をお願いしているのが、快く応じてくださる、そのまま夏休みの宿題として生徒に課される、とう仕組みになっている。」

一 祖父母は家で塞ぎがちであったが、交通機関の無料パスをもらえるようになってから、元気に外

しては、一番身近かもしれない。これが社会人になると、農家の方なら農業関係の補助金とか商売をされている方なら制度融資の利子補給などと身近に実感できるものがあるだろうが、大多数のサラリーマンではさて何があるであろうか。

元々、租税負担は広く国民に求めているものであるが、国民が等しく享受して

増税議論になると「税金のムダ遣いを減らせ」となるが、何がムダ遣いかは議論百出の状況である。何に

税金は使われるべきかの認識（あるいは優先度）が、立場立場によって異なるのである。そんな混沌迷の中、賦課徴収の前線に立つ税務職員は、説明責任を果たすべく日々奮励努力しているのだから。

田回修由
(93年度生)

今年は大学を卒業して10年目という節目の年に当た

ります。私は、このうちの7年間を民間企業の社員として、残りを兵庫県職員として過ごしてきました。

私は学生時代、勉強せずクラブ活動に専念していましたが、それでも何とか卒業し、民間企業に就職しました。前職では、人生の大きな選択の一つであった、駐在員としてニューヨークへの異動の打診がありました。当時、長男が大変な未熟児で生まれた直後であったため、本当に悩ましい日

現在は、宝塚市北部に残された貴重な自然を、開発は最小限に留めつつ里山公園として整備する仕事をしています。公園整備という性格上、技術的な内容が多く、理解するのに苦労していますが、議論を重ねた結果が図面上に表現され、実際に形になることが面白く感じる一方、責任も感じます。

当事業は開始直後であり、仕事と家庭の両立は比較的容易です。前職では仕事に追われ、面倒を見ることが

できなかった長男は、私が抱くとすぐ泣き出したものですが、今年2月に誕生した次男は懐いてくれているように感じます。『ワーク・ライフ・バランス』という言葉を最近よく耳にしますが、幸運にもバランスが取れている数少ない一人ではないかと感謝しています。

このように私なりに充実した10年が過ぎようとしています。これからますます

充実した生活を送るために、
新たな目標を持って過ごし
ていきたいです。

最後まで読んで頂いた感想は如何だったでしょうか。楽しんで頂けたでしょうか。このように、藤馬先生の下で学んだ方々から、原稿を寄せて頂き『龍のおとし子』として機関紙にさせて頂いておりますが、もっと幅広く原稿を寄せて頂きたく、原稿募集のお知らせをさせていただきます。よく、「何を書いたらよいのか…」などと言われますが、藤馬龍太郎先生の「おとし子」として、遠慮せず原稿を寄せて下さい。六百字から八百字くらいで、思い出の写真や旅行先での写真なども添付して頂いて結構です。今後も充実した機関紙にしていきたいと思いますので、より多くの方々からの原稿をお待ちしております。来年発行予定の「龍のおとし子18号」に向けて、次のメールアドレスまでお送りくださいますようお願い致します。



OB 通信

〽西から・東から〽

瀬津幸代 (95年度生)

September 11, 美国国殇

多発テロから5年。先日、史上最悪と言われるこのテロを題材とした映画「ユナ

「機内の1機「ユナイテッド93」が公開されました。ハイジャックされた機内の1機「ユナイテッド航空93便」の機内で、墜落する最後の瞬間まで諦めずテロリストに立ち向かった乗客の姿を、実話を元にした描いた映画です。ストーリーは私にとって衝撃的で

返しTVで流れ、肝心な情報は何だっただのか、映

画鑑賞後に改めて考えさせられました。

旅行業界は、平和と安全が前提の「平和産業」です。

私事ですが、大学卒業後、旅行業界で約8年間働いておられます。9・11直後は、繋がらない国際電話と闘いながら北米滞在中のお客様の安否確認、そして不安を抱く日本のご家族への対応に慌しく駆け回っていました。悲惨な映像だけが繰り返されていきます。その反面、海外渡航者数は、テロや戦争、天災の影響を顕著に受けます。9・11の影響は特に大きく、テロ後は北米行きのみならず全方面で渡航者数が激減しました。そして5年。残念ながら一部の国では今尚悲しい出来事が起きています。

日本人の海外渡航者数は回復しつつあります。これが実は、天災やテロ後、復興に取り組む国々にとつての重要な資金源となっているところに大きな意味があります。観光客からの観光収入が景気回復の一端を担い、地域の活性化と復興に欠かせない貴重な財源となっているのです。

テロや天災後、被害国への渡航を躊躇うのは安全面や心理面で当然な事です。しかし前述の実態を知って頂き、1人でも多くの方に海外旅行をして頂きたい、と思います。とはいえ現地事情を無視して現地の方の心情を逆撫でしては元も子もありません。そこでそういった国々の文化・背景・歴史への知識を深め、正しくお客様に伝える所に旅行会社の存在意義はある、と感じています。

平和産業の前提である世界平和に対し、今後も微力ながら仕事を通して貢献していきたいと思っております。

今年で、藤馬会の開催が第二〇回を迎え、『龍のおとし子』の発行も第十七号となりました。これも、ひとえに藤馬先生および藤馬会会員の皆様のご協力の賜物だと感謝しております。

昨年の編集後記で、一々十六号の中で第四号だ
 けが手元に無いといつておりましたら、さっそく
 藤馬先生から、貴重な第四号の写しを頂き、晴れ
 て第一号から第十六号まで揃えることができました。
 先生、有り難うございました。全部揃えたか
 らと言つて景品が貰える訳でもないのですが、シ
 リーズものを揃えなくなるマニアの気持ちが少し
 分かったような気がしました。また、順番に読ん
 でみると、時代の流れを感じられ、かなり楽しい
 ものです。皆様も、今からでも『龍のおとし子』
 を揃えてみては如何でしょうか。

シリーズものといえは、食玩（三百く五百円ぐらゐのコンビニで売っている箱入りおもちゃ。ラムネ菓子などが一つ入っている。）が浮かびます。一つ一つはさほど高価なものではありませんが、全部揃えるとなると結構な金額になります。先日、子供とコンビニに行った際、食玩の前で悩んでいる姿を見て思ったのですが、大人にとって、シリーズものを一気に購入することも可能でしょうが、子供にとっては、自分の小遣いで一つをかうのがやっとでしょう。だから子供にとつては、「同じものにならないだろうか」とか「希望のものが入っているのだろうか」などと、選んでいる時が真剣そのもので、まさに人生最大の決断の時であるかのようにでした。その姿を見て、一個一個また一回一回が大切なものだという感覚を忘れない、大人になりたいと思いました。（すでに、十分オヤシになっておりますが。）

これからも『龍のおとし子シリーズ』の発行を継続して行くことが出来ますよう、皆様のご協力をお願い致します。最後になりましたが、期間の短い中またお忙しい中にもかかわらず、十七号の発行のため、原稿依頼をお引き受け頂いた会員の方々、本当に有り難うございました。

(79年度生 亀井 徹)

